



# ひろせホーム通信 2021年7月



千葉県小規模住居型児童養育事業（ファミリーホーム）ひろせホーム 代表 廣瀬タカ子

もうすぐコロナ禍での2度目の夏休みがやってきます。思い返せば去年は新型コロナウイルスの影響で新学年のスタートが遅れ、学習時間を確保するために夏休みが大幅に短縮されました。

厳しい暑さが続くこの時期は、冷房をつける一方で換気のために時折窓を開け、こまめに水分を補給したり外出時には必ず帽子をかぶるなど、感染症対策と熱中症予防を両立させなければなりません。

夏休みは、子どもが普段できないような体験をする絶好の機会。さまざまな経験を通して子どもは大きく成長します。難しい状況ではありますが、感染防止を第一に、なんとか夏休みの思い出をつくってあげたいと思います。



## ひろせホームの家族

Lちゃん・・・小学2年生の女の子。先月で8歳になりました。

Rちゃん・・・幼稚園年少の女の子。トイレトレーニング、お話すること、ごはんを早く食べることが課題です。

KJくん・・・来月で3歳になる男の子。いつもホーム内を所狭しと駆け回っています。

YIちゃん・・・来月で1歳になる女の子。ハイハイとつかまり立ちができ、好奇心旺盛に動き回ります。

YKちゃん・・・高校1年生の女の子。5月下旬からひろせホームで暮らすことになりました。

ホームのお父さん、お母さんと、おばちゃん（お父さんお母さんの実子）、おじちゃん

KOくん（中3男）、YUちゃん（小6女）・・・おじちゃんとおばちゃんの実子

### ◆5月8～9日

「母の日」に合わせて、LちゃんがYUちゃんと一緒に晩ごはんを用意。Rちゃんも手伝って、8日は目玉焼き、9日はカレーライスをつくりました。なかなか美味しかったです。

### ◆5月9日

YIちゃんを抱っこして家の周辺をお散歩。真っ赤な花が咲いていたので、立ち止まって「綺麗だね」と話しかけました。YIちゃんが手を伸ばそうとしたその先には大きな蜂。急いでその場から離れました。怖いもの知らずのYIちゃんでした。

### ◆5月17日

2段ベッドが届いたので、お父さんとおじちゃんが協力して組み立てました。その途中、Lちゃんが学校から帰宅。ランドセルを背負ったまま嬉しそうにベッドの周りをウロチョロしていたけど、作業の邪魔になっているよ(笑)

### ◆5月24～25日

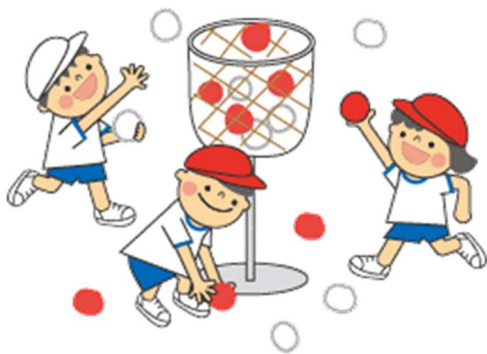
24日に、ホームを巣立ったMちゃん（大学1年生）、Hちゃん（高校3年生）の姉妹が遊びに来ました。2人は時々ホームに顔を見せてくれます。そして25日にはMちゃん、Hちゃんに加えて久しぶりにAちゃん（22歳）も遊びに来ました。ホームを訪れるのはおよそ9年ぶりのAちゃん、とても懐かしそうにしていました。

◆5月28日

お母さんの足がパンパンに腫れていたのので病院に行ったら、蜂窩織炎と診断されて緊急入院。その夜、お母さんからLINEで「子どもたちのいるホームに早く戻りたいよ〜」。その前に、ちゃんと治して下さい！！

◆5月29日

小学校の運動会。LちゃんもYUちゃんも大活躍でした。Lちゃんが頑張ったシーンは、LINEで病床のお母さんに共有しました。



◆5月30日

食べ物が上手に噛めないRちゃん。食事の時、おばちゃんから「両方の奥歯でモグモグするんだよ」「ほっぺにためるんじゃなくてゴックンするんだよ」といつも注意されています。Rちゃん、うまく食べられるように頑張ろうね。

◆6月1日

バスケットボールが大好きなYKちゃん、Bリーグのチャンピオンシップ決勝をテレビ観戦。その横でLちゃんとRちゃんが、ふだんはめったにしないボール遊びをしていました。素晴らしいプレーを繰り広げる選手に影響された？(笑)

◆6月2日

いつもマイペースで家中を走り回るKJくん。子ども向け音楽番組で好きな曲が流れている時だけはテレビ前の机の上にちょこんと正座して、じっと音楽を聴いています。静かなのはいいけど、机は座るところじゃないよ(笑)

◆6月6日

Lちゃん8歳のお誕生日会。ポケモンのキャラクターをかたどったバースデーケーキもピザも骨付きチキンもフルーツも美味しくて、ルンルン気分のLちゃんでした。



◆6月9日

5月の初めにハイハイとつかまり立ちができるようになったYIちゃん。最近は気がつけばリビングから廊下を通って洗面所やキッチンまで一人で移動しています。危険な場所に行かないかと心配で、片時も目が離せません。

◆6月12日

お母さんが退院。久しぶりに子どもたちと会って、ほっとひと安心のお母さん。お母さんの元気な顔を見て、子どもたちも嬉しそう。ひろせホームにいつもの日常が戻ってきました。

◆6月15日

母音だけではなく「ダー、ギー、ブー」などの声も発するようになったYIちゃん。喃語がどんどん盛んになっています。乳児の成長はあっという間ですね。

◆6月20日

何度もホームを取材している記者のKさんが来園。「父の日」に魚の高級干物セットをプレゼントされ、ご満悦のお父さんでした。仕事の合間にホームの行事に参加してくれるKさんに、子どもたちもすっかり懐いています。

◆ 6月23～25日

23日の朝方から39度台の高熱が出たYIちゃん。発熱は25日まで続き、熱が下がるとともに皮膚にブツブツが発生。突発性発疹でした。熱が高いうちは水分を十分補給するように心がけました。



### 『一年が経過して』

柴田 誉子

昨年6月に、ひろせホームで常勤補助として働き始めて早や一年が過ぎました。それまでも廣瀬家の実子として子どもたちと生活を共にし、結婚して大阪に嫁いでからも時折ヘルプに来ていたので、ファミリーホームは知らない世界ではなかったはずでした。

ただ、ホームの一員となって以降は、毎日子どもたちの様子を気に留め、ホームの養育者（つまり私の実親）と話をし、何か心配事があれば児童相談所と情報を共有する。ファミリーホームの日常は暇無しだなど改めて感じています。

振り返れば今年の春。ホームに手伝いに来ていた時、“老体に鞭打って、ではないですが、高齢の両親が必死に子どもたちを追いかける姿を見て、もっと自分にできることは無いかと考えたのが大阪から千葉に拠点を移すきっかけになりました。

病気や怪我などで入院するような事があつたら、何より重要である継続的な養育が難しくなる。廣瀬の実子として、もっと密にホームをサポートしたい。さらに長い目でみると、ホームから巣立った子どもたちが、ふらっと立ち寄ることのできる場所をできる限り守っていききたい。

大阪に戻り、さっそく夫に相談。理解を得て、実子2人を連れて引っ越した次第でした。急遽転校することになった子どもへの影響が気でしたが、「じいちゃん、ばあちゃんと一緒に暮らし、ホームの子どもたちと遊ぶことができる」と喜んでくれたので安心しました。

ただ、ホームの子どもたちの世話を傾注していると、実子とのふれあいが少なくなるのではないかと、そんな不安もありましたが、実子が率先してホームの仕事を手伝う姿を見ると、それも杞憂に過ぎなかったようです。そしてこの4月には、大阪での仕事を辞めて夫もホームの一員となりました。ひろせホームのおじちゃんとして、事務作業や子どもたちの世話などに汗をかいています。

冒頭、早や一年と書きましたが、実はまだ一年しか経っていません。まだまだ勉強することばかり。子どもたちにとって最適な養育環境を提供できるように、日々努力していきたくと思います。子どもたちの成長に負けないように、私自身も成長していきます。

## 〜〜 ちよつと休憩 〜〜

新型コロナがまん延する前の話。馴染みのお店で店主と語りながらお酒と料理を楽しんでいました。そろそろ帰ろうかと「お愛想をお願いします」と言うと、店主から「その言葉遣いは間違っている」と指摘されました。

店主が言うには、お愛想という言葉はそもそも「お楽しみのところ代金の話をするのは愛想がなくて申し訳ないのですが…」と、客に金額を伝える際にお店側がへりくだって使っていたもの。お店側が勘定と言うとぶっきらぼうに聞こえるので、この言葉が使われていたとか。

それがいつの間にか勘定そのものを指し、誤って使われるようになったそうです。本来の意味で客が「お愛想して」と言うと、こんな店には愛想が尽きたから会計してくれ、というニュアンスになってしまいます。

店主いわく、「料理人が食材を間違えて使うと、お客さまに出せないような料理になる」。時代が変わる中で言葉の持つ本当の意味が失われることがあっても、やはり本質を踏まえて日本語を使うべき、ということでしょうか。

そろそろ帰ろうと思ってから小一時間。この間、お酒を2杯ほど追加注文しましたが、会計時に「帰ろうとしたのを引きとめたから追加分はサービスします。うるさいだけの愛想のない店には二度と来ないと思われたら困るから」。そう言って笑った店主の顔を思い出しながら、この文章を書き終えました。(S)

## 【編集後記】

子どもに関する施策を一元的に担う「こども庁」の創設に向けた動きが今後本格化します。こども庁は、子どもの年齢による切れ目や省庁間の縦割りの排除、教育と福祉の連携などを目指します。

われわれの宝である子どもがしっかりと守られる体制の構築が不可欠なのは言うまでもありません。ただ、こども庁については「大人の都合」だけで議論が進んでいるように感じます。

子どもの権利条約の一般原則には「子どもの最善の利益」「子どもの意見の尊重」が掲げられています。こども庁について議論する中で、子どもにとって最も良いことを優先するのは当然のことです。

さらに言えば、子どもの意見も取り入れる必要があると思います。こども庁の創設に際し、子どもが意思を表明できる場が設けられてしかるべきです。縦割り行政の弊害を排することだけが目的ではありません。

大人が考えたものを一方的に押し付けるのではなく、権利の主体である子どもの意見が反映された組織の発足を強く望みます。

(ホーム通信担当・柴田恭輔)

5月の下旬から2週間ほど蜂窩織炎で入院しました。病院では子どもたちが待つホームに一刻も早く戻らなくてはと常に考え、ベッドで横になっていることがストレスでした。

子どもと少しでも離れている状況が我慢できないのは「職業病」ですね(笑)。子どもたちと一喜一憂する当たり前の毎日がありがたく感じられます。

入院中は夫と娘夫婦がホームの子どもたちを守ってくれました。予想していなかったことが起きてもホームを滞りなく運営するためには、やはり補助員の存在が不可欠だと再認識しました。

廣瀬タカ子